

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

平和運動におけるロマンチズム

畑 敏雄

いつか私は居住地の文化団体のニュースに、「市民運動にユーモアを」というエッセーを書いたことがある。その趣旨は、市民運動はユーモアをもつて楽しくやりたい、それが運動の活性化と長続きの秘けつであるが、それだけではなくて、いわゆる思想信条、生活環境を異にする人びとの運動にとって、ユーモアは潤滑剤にも接着剤にもなる、というものである。

このことは平和運動に対しても、より適確に当てはまるだろう。小異をすてて大同に比べると言うが、大ていの場合小異の衝突によって大同が失われる相違点を尊重すること、これも広い意味でユーモアの精神である。

ところでもうひとつ、私には「科学におけるロマンチズム」という大論文(?)がある。これは東京工業大学を定年退官するとき、最終講義として行った講演の記録であるが、私としても三十数年間の研究生活の総決算であったし、各方面でなかなかの評判をいただいたものである(自分でいうのもおかしいが)。

その調子に乗ったわけではないが、群馬大学に移って、いろいろな教育関係の集いに引張り出される機会が多くなると、「教育におけるロマンチズム」を語るようになり、これが私のうひとつのレパートリーになった。それをさらにふえんして「平和運動におけるロマンチズム」はどうだろうというのがある、この文章の目的である。

厳格なるべき科学、神聖なるべき教育と夢想的といわれるロマンチズムをくつつけるとは何事かとお叱りを受けるかも知れないが、私にいわせれば科学者はロマンチストでなければならぬ、教育者も同様だと思ふ。というのは、科学は自然に対して(社会科学であれば歴史と社会に対して)、そのなかにふくまれる真理の発見をめざす。同様に教育は、必要な知識を教える(ティーチング)ということも大切であるが、それは教育の一面であって、本来エデュケーションと言われるものは、子供たちのもっている可能性や優れた才能を発見して引出すこと(動詞エデュースは引出すこと)であって、

これが教育の本質である。とすれば自然科学者が自然に対して発見の努力をすること、教育者が子供に対してエデュケーションの努力をすることは同じではないか。そこに流れるものは、かかれた可能性、未知なるもの、美しいもの、尊いもの等々に対する憧れと信頼である。これを私はロマンチズムと呼ぶ。

科学の研究でいえば、平凡な一本の曲線で表された実験事実でも、そのなかには真理のたくさんの因子がふくまれている。その可能性を虚心にどれだけ並べることができようかが勝負である。そのなかでつぶしてもつぶしてもつぶしきれない可能性が二つでも三つでも残れば、それが次の問題意識になり研究は発展する。

科学や教育がそうであるように、平和運動もそれを担う人民大衆の中にこそ真実がある。そのあらゆる可能性を引出すこと、多様性を歓迎すること、そこにこそ運動の原点があり発展の契機がある。既定の王道などというものはない。(本論が尻切れトンボになっただが再論を期したい。)

△元群馬大学長・第五福竜丸平和協会 評議員▽



安藤幹衛氏(一九一六)は、名古屋市在住の画家である。現在も二科会の理事を務めるなど活躍し、作品は海外にも広く紹介されている。

彼の師は、東郷青児と共に二科

第五福竜丸をとらえる……

作品介绍④
安藤幹衛

会の双壁といわれた北川民次である。北川は戦前、長くメキシコに在住し、壁画運動を通して、民族の本当の姿を描こうとしたシケイロス、オロスコなどの力強く生命力あふれる絵に啓発される。帰国後も、彼らの思想を自分の絵の中にとり込み、庶民の生活の現実を描き続けていく。北川は、多くの若き画家たちに影響を与えたが、中でも安藤氏は師のヒューマニズムを最も受けついで一人であった。

第五福竜丸が被災した時、安藤氏は、「モルモットはごめんだ」(五四年)「父帰る」(五四年)を描いている。「父帰る」は久保山さんの死を意味する。作者の思いは、



モルモットはごめんだ (部分・1954年)

のに、人間破壊につながることは…人間の良心として描いた」と語っている。

二つの作品は、水爆実験、死の灰への怒りを、人間の悲しみ、嘆き、生への尊厳として、表現している。「第五福竜丸」を描いた画家は、けっして多くない。その中でも「人間として描いた」と語る安藤氏は、第五福竜丸の被災をもっともストレートにとらえた画家であった。

一九六一年、長年の夢であったメキシコ行を実現させた安藤氏は、師を通して学んだことを現場で確認し、以後多数の壁画を制作していくと共に、メキシコとの文化交流に力を注いでいる(S)。

修学旅行と折鶴でいっぱい

五月。夢の島にはつつじが咲き乱れ、展示館は修学旅行の中学生で溢れる。今年とりわけ多く、それぞれに、心に残るものを」と企画が練られているように見える。見学のあとは、デイズニールランドへという学校も多い。

五月七日、和歌山県田辺市から来館した明洋中学(三百五十名)は、クラス毎何回も学習し、羽ばたく鳩を型どった画用紙にひとりひとりがメッセージと氏名を記載、千羽鶴の束と共に、展示館で「授与式」を行なった。生徒の代表前田家利君は「第五福竜丸を建造した祖父の記憶から」と題した作文を大きな色紙五枚にビッシリ書き一部を朗読。おじいさんの船に会えてうれしいと感想をのべた。

五月中、和歌山からの修学旅行は三〇余校にものぼる。岩手・山形・三重・滋賀からも。折鶴の贈物に、作文に、熱意がにじむ。

五月十日、神奈川の中沢高校からは三年生約五百名が来館、折から取材中の日本テレビのカメラに向いピースマーク。十四日、広島へむけ平和行進も出発する。

平和随想 (六)

三宅 泰雄



パグウォッシュ 科学者会議の日本版といわれる科学者京都会議が、京都嵯峨の天童寺で開かれたのは、いまから四半世紀前の一九六二年五月のことでした。呼びかけ人は湯川秀樹、朝永振一郎、坂田昌一(いずれも故人)の三人でした。そのころの時代的背景を回顧してみましよう。その二年前(一九六〇)には、新日米安保条約をめぐって、世論が分裂し、その五月には、衆議院に警備隊を導入して、与党だけで条約を単独採決するという暴挙がおこなわれました(当時は岸内閣)。これに抗議して、一七万人の大衆が国会議事堂を包囲するなど、物騒騒然となり、予定されていたアイゼンハワー米大統領の訪日は中止となりました。

さらに六月には、全国で五八〇万人が動員されて抗議デモ。国会議事堂周辺では、デモ隊と警官隊・右翼との間で大乱闘のすえ、東大生 樺美智子さんが殺され、一八二人の逮捕、一〇〇人以上の負傷という、異常かつ、いたましい事件が相次ぎました。社会党の浅沼稲次郎委員長が、日比谷公会堂で演説中に、右翼少年に刺殺されたのも、その一〇月のことでした。国外では、東西ベルリンを隔てる「ベルリンの壁」の構築、大規模な大気圏内核爆発の実験再開、それにもとづく地球規模の放射能汚染、米・キューバの断交、ソ連の人間衛星打ち上げ成功(以上、一九六一年)等々、国内、国際ともに緊張を高める事件が相つづきました。

このような状況下で、平和をのぞむ科学者の小グループとして発足したのが、科学者京都会議でした。この会議はパグウォッシュ科学者会議の基本理念を踏襲していましたが、パグウォッシュ会議とはちがいで、社会科学者や作家にも参加をよびかけました。なかでも大内兵衛、谷川徹三、大仏次郎の諸先生は、この会を熱心に支持し

て下されました。

会議は三日間にわたって、熱心な討議がつつぎ、最後に次のような声明をまとめ、外部に発表しました。「人類の成員として、この地球上に生れあわせた私達は、居住する地域を保持する信条のいかんにかかわらず、私たちがすべてに共通する重大な問題に直面していることを認めざるをえません。いままでもなく、これは人類が今後も存続し、繁栄をつづけてゆくか、戦争によって破壊するか、という問題であります。」との書き出しで、それまでのパグウォッシュ科学者会議の活動状況が紹介されています。そして「核兵器による災害を経験し、戦争放棄を明記した憲法をもつわが国民の責任として」次のような提言をしています。

- 一、科学の誤用、悪用の防止。
 - 二、核兵器による戦争抑止政策は、戦争廃絶に逆行。
 - 三、大気圏内、核兵器実験の即時停止。禁止協定の早期締結。
 - 四、核兵器軍縮から軍備の完全撤廃の早期実現、核兵器運搬手段の廃棄。国外基地の撤去。
 - 五、軍縮の積極的側面の検討。
- 最後に「これらの切実な諸問題に直面して、私たちの思考は、国家

主権だけを絶対視する現状を越えて、新しい次元に向けて開かれなければならないと結んでいます。その後、科学者京都会議は、第二回を広島県竹原市(一九六三)、第三回を東京(一九六六)、第四回を京都(一九八二)、第五回を東京(一九八四)で開き、その都度、声明文を発表しています。このほかに、「勉強会」が鎌倉の東慶寺(駆け込み寺)、比叡山麓、大山市等で何度か開かれました。この間、一九七五年八月末にパグウォッシュ会議第二五回シンポジウムが京都で開かれ、一五か国三人の科学者が出席しました。この時発表されたのが「湯川・朝永宣言」でした。

宣言では核抑止論の非合理性を指摘するとともに、「私たちは、核軍縮の第一歩として、各国政府が核兵器の使用と、核兵器による威嚇を永久かつ無条件に放棄することを要求する。」と訴えています。

ビキニの海は忘れない

核実験被災船を追う高校生たち

山下 正寿

高知県西南部の幡多郡では、「幡多高校生ゼミナール」が、足もとから平和と青春を考えよう、と地域の平和問題の調査をしています。三年前の三月、地域の被爆者問題調査途上で、長崎とビキニで二重被ばくした青年の死につきあたりました。さらに、室戸水産高校生がカツオ漁業実習中に放射能雨を及び、その年の十二月に白血球減少症で死亡した事件を知りました。二人の青年の死を追跡することから、高校生たちはビキニ水爆実験のもたらした被害の実態を浮きだすことになり、学習と調査が三年間続けられました。

被災漁民を訪ねて

被災漁民は幡多郡のほとんどの漁村にいました。二十四名が核爆発の光や雲を見たと言言し、白い灰が船に降り積っていた、被ばくマグロを放棄したと言言する人が続出しました。特に内外の浦調査

では、新生丸乗組員中四人ががんと脳しゅようで死亡していました。「たいていも死なんような頑丈な男が、突然倒れる。血をはいたり、腹が異常にふくれたりしてあつという間に死んでしまう。この漁村で若死したのは皆マグロ船に乗っていた者だ」と訴える被災漁民もいました。

マグロ漁港・室戸へ

「幡多高校生ゼミナール」はビキニ被災調査二年目の夏に室戸調査にゆきました。高知市や安芸郡の高校生と共に、室戸地域の被災漁民や室戸岬測候所、室戸岬漁協などマグロ漁業の基地室戸でビキニ事件のもたらした影響と原水爆反対運動の歴史を学びました。

特に、第七大丸の元船長の「ビキニ東方で空と海がまっ赤になり、きのこ雲があがるのを見た。その後、機関故障でウェーキ島に緊急入城したが、私だけがハワイの病

院に軍用機で連れていかれて精密検査をうけた」という証言は衝撃的でした。

長崎・平和の旅

調査三年目の夏は、長崎での「第十四回全国高校生平和集会」へ参加するために高校生三十七名(顧問十名)が旅立ちました。途中で長崎県口之津町に立ち寄り、弥彦丸の関係者から聞き取り調査をしました。弥彦丸は六千八百九十四トンの貨物船で南太平洋のマカテアと釜石の間、リン鉱石を積んでの二回の航海が三月一日からの六回のビキニ水爆実験期間中でした。二回目の帰航中に船員に症状が出て、帰港後に入院、検査をうけ放射能症の疑いをもたれました。乗組員四十八名のうち、すでに十名が死亡、生存者の三分の二が健康障害を訴えていました。死亡者のうち三名が長崎県口之津町出身者であり、その遺族の方たちから証言を得ました。

八月九日の「全国集会」フィードワークの一つに、長崎・淵中学校での慰霊祭参加が実現しました。この淵中学校は、宿毛の二重被ばく者・藤井節弥さんが当時淵

国民学校高等科一年生の時に在校していました。

慰霊祭では高知県から持ってきた約千五百羽の千羽鶴をささげ、詩を朗読しました。

この平和の旅で、長崎・ビキニを結びつけ、全国の高校生にビキニ被災船調査を提起しました。

全国調査へ

四年目の夏は、東京の第五福竜丸展示館から静岡県焼津へそして広島へと向かう平和の旅を企画しています。ビキニ被災の実態を全国の高校生に伝えようと、合唱構成詩を作成し、「ビキニの海は忘れない」(汐文社)を発売し、三年間の歩みをまとめました。

すでに調査は、沖繩・山形・岡山へとひろがり、準備をはじめたところも出てきています。五月十一日には高知県ビキニ被災船員会が誕生します。ビキニ事件は今も生きつづけている国際問題です。国連軍縮総会には高校生たちのメッセージをもってゼミの顧問が参加します。

(幡多高校生ゼミナール顧問)